
紅き伝説

レッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅き伝説

【Zコード】

Z0161Z

【作者名】

レッド

【あらすじ】

火災現場で死ぬ寸前に少女と出会い異世界へ

しかし能力もよくワラカナイ主人公!
どうなるの~

そして運命の女神に愛される主人公の運命は~

プロローグ

俺の名前は高橋 俊。年は23才

さていまの状態を説明しよう。

高卒と同時に消防士になり何度目かのビルの火災現場。

別に危険な現場ではなかつた。慣れたものだつた。

命綱を付け、先輩と一緒に逃げ遅れが居ないか屋内に侵入したまでは良かつた。

火災は大したことなく煙が凄いだけだつた。そのため排煙をするべく先輩と離れ窓を開けに行つたのが思えば俺の運の尽き。いや始まりか……

先輩と離れ排煙をするべく窓を開けに行つたらまだ確認していない部屋を発見。
逃げ遅れが居ないか中を開けてみる。

部屋を探しても人は居ないか……窓も無いし部屋を出ようとしたら俺は目を疑つた。

扉が無い！

おかしい、それにさつきはうつすらだつた煙が濃くなり周りが見えない！！！！！

なぜだ！やばい！

壁伝いに歩くも出口は見つからない……

もうダメか……思えばいい人生だったのだろうか。

そういうば俺の周りは何時も大変だったな……

学生時代は、俺は成績は普通より上だったのに何時もクラスで悪く、教師から怒られ消防学校でも同じ

他にもいろいろあつたがもう呼吸器がやばいな……

そんな時俺の前に花びらが

「サ……ク……ラ……？」

「何でここに?」

そして目の前に1人の女の子

いや少女か……

さつきは居なかつたのになぜ?

少女「生きたい？」

ああ…………幻か…………

少女「生きたい？」

も「やばい」な呼吸器の計器も〇を指してくる。息もできない。

まあ幻にこんなの言つても仕方ないかけど

「ああ生きたい、そして知らない世界を旅、いや冒険してみたかつたよ」

そして、俺の意識は闇に落ちた……

「気づくとそこには先の見えない暗闇だった……」

「あれ？俺、死んだはずだよな？」

「いえ、まだ死んでおりません。」

「！？」

突然の声に後ろを振り返ると先ほどの少女が立っていた。
いや美少女かい今まで見たことない美少女だよ。

「あなたはまだ死んでおりません。あの時あなたは偶然にも神の領域に足を踏み入れてしまいました。」

「神の領域？あの扉が」

「ええそうです。本来なら入れないのにあなたは入ってしまった。
それは世界のバランスを崩してしまつと言つこと、なのあなたは
今この場所にいます。」

「もとの場所に戻れないのか?」

「不可能です。あの世界でのあなたは死にました。そして、神の領域
に入ったあなたには別な世界に異世界に行つてもらいます。それ
が世界のバランスを保つためです。」

「はあ、バランスね……」

「そつバランスです。しかし、そのまま 異世界に行くのはあまり
に不憫だと神々が判断いたしました。」

「はあ

「そこでこれです」

少女は二つの間にか白い箱を突き出したいや血臭い顔で出されて
もどつてしまふと……

「「」の中に異世界で役立ついろいろな能力が入っております。」

「はあ」

「一回引いて中のボールを一つお取りください。」

言われるまま箱に手を入れ中のボールを出す。

黒いボールが出てきた。

「なるほど、やはりあなたは面白い人ですね。では異世界に行つて貰います。」

「えつー！能力の説明は？」

体が白く粒子になつていく

「神々の決定では能力の説明は伝えてはならぬと決まつておりますので」

「えええ～～～！」

異世界行つて能力が分からなくてどうしようと
しかし、もう体のほとんどが無くなっている。

「じゃあ君の名前だけでも！」

「運命の女神と他の神々からは呼ばれております。ではまた。」

そうして俺は異世界に旅立った。

運命の女神「やはりあの人は面白い。神の領域に入り、そして異世界での能力も…………うふつ初めて人を好きになりましたわ。高橋

俊……面白い人……………あの方なら私の夫に相応しいかも……………
神と人、結婚してならないと言つ決まりはないのだから……………異
世界に行つても私を楽しませてね俊……あと能力からの他に私からの
餞別よ。」

そう言つと女神は一振りの刀を取り出した。

「さあ、あなたはこれを使いこなせるかしら?」

そう言つと刀が光に包まれて消えてた。

「さあ行つてらつしゃい俊!力を付けて神の領域に達しなさい。私は応援してるわよ。」

運命の女神の独り言は闇に消えた……………

駄目文ですね

「知らない天井だ……つて違う……天井無いし空だしー。」

ふう~ボケはここまでで、夢ではないか……

しかし本当にここ異世界?

服も変わってるし……

これがさつき引いた能力か?いや服だし違うか。

先ほどの火災現場の防火衣の呼吸器フル装備とは変わって上が黒いTシャツ、したが黒いズボンにそして靴も黒い靴に変わっていた。

「黒尽くしですか……まあ黒好きだし別にいいか……」

さて見る限り草原だしどうしよう

いや違うか……遠くに街らしきものが見える。

まあ取りあえず街に向かうか……

「うそ？」

すると足元に刀が転がって倒れるのに気がつく

「なんだこれ？ いや刀か……しかしこれも黒いのな……」

何も無いよりましか…………持つていくか。

「うつて俺は街へ向かうのだった。

俊は刀を手に入れた。

「おお～遠田でもわかつていたが、やけに異世界？ いや～中世ヨー

ロッパ的な感じだの〜「

街の入り口で俊は改めて異世界にきたと感じていた。

「さて、普通に入れるのかね？」

そう問題はそこにある全身黒づくめの俺が街に入れるのか？身分証明とかできませんけど…………

「取りあえず行くか…」

変な所でポジティブな主人公であつた。

街の入り口では案の定、門番らしき数名が検査を行つていた。

「次のものーー！」

門番に促され前に出る。

「身分証明書はあるか？」

やはりかたか…

「あははは……………ありません。やつぱりダメでしょうかね……………」

「なんだ？お前、身分証明書が無いか？」

「

ええい！」は適当な嘘を

「ええ、この街は初めてでして。実は田舎から出てきたばかりで……」

行けるか？

「まあよい冒険者になりたい」という田舎の若者がよく来るのでな……では街に入る為に税金100クールをを収めて貰う。」

あれ？大丈夫だった……

うん？お金？

やべー金ねー……しかも100クールってなに?

取りあえず服をガサゴソ……

うん?あれこんな袋あつたけ?

取りあえず中を見てみる。

中にはよくわからないけど銅貨や銀貨が少し入っていた。

取りあえず前のおっさんが出していた銅貨を一枚だす。

「じ、じゃあこれで……」

「ウム!確かに。」

おお~合ってたみたいだ。

「では、ようこそモーネの街へ。あとお前が冒険者になつたら街に入る為の税金は無くなるぞ。良かつたな坊主！」

ほ~そ~うな~のか……いいな冒険者。

その後なんとか無事、街に入れた。

しかし本当になんかネットゲーみたいな世界だな。さつきの門でも刀を注意されなかつたし……

それに、エルフぽい人や全身鎧の人、獣人？みたいな人がいる。剣してる人もちらほら

さてどうしよう……

さつきの門番のおっさんが言つてた冒険者になりに来る若者ね……
お金もあるにはあるけど無限じゃないし、あと銅貨9枚に銀貨か？
が5枚だし……

えっと……銅貨1枚が100クールだな。銀貨はその上だと考えてウーンどの位の金額がわからない。

とつあえず田舎から出てきた若者でもなれる冒険者になつてみるか。

つでビードなるの！？！？！？

2 時間後

「やつと着いた…」

最初に人に聞けば良かつた！

まあ迷ったおかげで貨幣の価値がわかつたよ。買い物してる人をじつと人間観察してね。

まず銅貨これはさつき門番とのやり取りで100クール

次に銅貨の下、これが半銅貨これが10クール

半銅貨の下が雑貨、これは1クール

雑貨が10枚で半銅貨にさらに10枚で銅貨にさらに10枚で銀貨になるらしい……あれ？半銀貨つてないの？？
謎だ……

ちなみに料理店や花屋とか色々なとこで人間観察したけど1クールは日本円で一円みたい……

現在の所持金5900クール

微妙

このままだと不味いよ、いざ冒険者に！――！

ガダン

冒険者になれると教えて貰つた建物へ

酒場？みたいな所だな……おっ！受付嬢みたいな人いるあの人に
聞くか！

「あの～すみません、冒険者になりたくてきましたのですけども……。」

「ハイ！新規の冒険者の登録ですね。では名前をここにお願いいた
します。」

おお～この世界の文字わからんよ！――

「あの～文字が書けません。」

「ハイ、大丈夫ですよそいつた人もいますので」

よかつた……

「では私が書きますのでお前を。」

「俊つてこます。」

「ハイ、わかりました。トシ様ですね。」

といいながら紙に文字を書いて行く……

うん？ローマ字？だよなああ～これなら俺書けるよ、よかつた一英語とか苦手何だよー

「ではこのカードに血を一滴たらしてください。」

と受付嬢が手のひらサイズのカードとナイフ出してきた。

言われるままにナイフで血をぽちっとな。

カードが淡く光る。

「ハイ、これで登録完了です。それでは冒険者の説明をさせていただきます。まず、そのカードはギルドカードと言います。身分証明書となりますので無くさぬように、またギルドカードにはその人の所属するチームやその人の能力などの個人の情報が入っていますので。」

へえ～と感じながらカードに目を落とす。

トシ

ギルドランクF

筋力D+

耐久D-

俊敏E+

魔力F+

ほつほつ…なるほどね。

「能力にもランクがあります。上はA+から下がF-筋力でいいま

すと、大体の男性の方がF+からE-ですね。一流の冒険者になりますとD-からD+でじょかBまでいきますと英雄の域ですね。」

ふうん筋力高いな

うん？これが神からの能力か？

「ギルドでのランクなのですけれどもクエストをクリアして昇任クエストをクリアなさいますと上がります。またクエストによっては失敗しますと違約金が発生しますのでお気をつけください。」

「また二つ名などついたり特殊職業や神や精霊加護がつく場合はカードトドや裏面に記載されます。」

へえ～と話をあまり聞かずにカードを見る

!-----!

なんだこれ

幸運G -

えつ A + から F - までじゃないのなにこれ

その後の受付嬢の話も聞かずに呆然とする後だつた

表面

トシ

ギルドランクF

筋力D +

耐久D -

俊敏E +

魔力F +

幸運G -

裏面

運命の女神の加護

ウム

刀

または日本刀とも言つ。耐久性を捨て切れ味に特化したものとでもいおうか。

さてギルドで登録したのだがいかせん金が無い！
その為クエストを受注したのだが……

「あ～宿屋代聞いてくるんだつたー」

今回受注したクエストはゴブリンを3匹討伐だつた。

ちなみにクエスト成功報酬は銀貨3枚の3000クール

宿屋代不明

日が暮れる前にと飯も食わずに急いできたのだが……

肝心の宿屋代がわからん……

野宿はイヤだよ……

まあなるよになるか…

さて今回のクエストの「ゴブリン」だが大体成人男性の身長の半分ぐらいで緑色のモンスターらしい

。

駆け出しの冒険者が狩る一般的なモンスターで亞種や希少種もいるらしい。

このモンスターを倒し、耳につけているピアスを剥ぎ取りギルドに持つていけばクエスト成功らしい……

らしい、らしいと曖昧なのは受付嬢の話を聞いてなかつたから

「ハア…」

なんだよ幸運G・つて…!!

突き抜けてますけど…!!下に!!

大丈夫なのこれ!

神から与えられた能力もわからんし、とりあえず今は今晚の宿屋を
とる為にゴブリン抹殺だ!

えっと北の森によくいるんだけ?

冒険者、ギルド受付

受付嬢「あの人丈夫かしら……話をボーッとして聞いてなかつ
たけど…間違つても1人で北の森に行つてないわよね…森の入り口
はまだ大丈夫でしょうけど、奥には熟練冒険者のチームでも気を抜
けないオーガだつているのに…」

「 」 が受付嬢のねーちゃんが言つてた森かな?」

歩くこと2時間、森についた。

ではゴブリンを探しますか……

…………

あと口から涎がボタボタと

ヤバいんじゃないのこれ…………あ～ちゃんと話聞いてるんだつたー

と考えてるとモンスターが斧を振り下ろしてきた！

卷之三

なんとか避けたよ。

「クソ！ゴブリンの癖に……」

色々間違っています。ゴブリンではなくオーガです。

俺も負けじと腰に差してある刀を抜く

抜けない

「あれ？」

そういうえばまだ一度も抜いてない！！！

「うおっ本当に抜けないよ～！」

「これしかないのに～神からの能力の切り札なのに～～～！」

「あつ～無理だよ～これ～～～！」

「つあえず逃げる～～～しかし悲しいかな、

俺の俊敏能力はE +

あの巨大ゴブリンも同じ位だよ……

えつ～要するに

「逃げれねー～～～～！」

巨大ゴブリンと差は広がらず、縮まりもせず。体力には自信があつたが森の中では分が悪い！――！

まだ追つて来るのかと走りながら後ろを見ると……

巨大ゴブリンが1匹から3匹に増殖！！！！

斧の2匹に棍棒1匹

なんと！ついでない！――！――！

幸運G - は伊達じやない！！！！！！

しかも疲れてきたよ。

俺詰んだか？

そんな走っている時目の前を桜の花びらが.....

「サクラ？」

キイン！――！

「うおっ！抜けたよ！」

サクラと呼んで刀が抜けた？
もしかしてこれが神からの能力か？
この刀が名刀とかなのか！
と考えてながら急反転！

追いかけてきた巨大ゴブリン達は急に獲物が反転したものだから3
匹絡み合い倒れる。

「チャンス！――！」

一番手前に倒れている巨大ゴブリンの頭に刀で突きを喰らわせる。

「ウガーガガガ.....」

と断末魔を上げてゴブリンが死ぬ.....

グロイが慣れてない訳では無い！！！

近くで起き上がりそつとゴブリンに切りかかる！！！！

あれ？刀握るとき右手だつけ？
どうでもいい！！！

とりあえず目の前のゴブリンの腕を切り抜く！！！

切り抜けない……

なんだと…………この刀切れ味悪いぞ

途中で止まっていた刀を無理矢理力押し腕を半分に斬つてやつた。
流石に筋力D+は伊達じやないな……

「ウガー！！！」

あれ怒つた？

あれもう一匹は？
と周りをみた瞬間

「ゴブッシー！」

ゴブリンの棍棒で吹っ飛ばされる。

とつたに刀で防いだが力を殺せなかつたらしい。

しかし俺の耐久はD-！

一流だぜー！ゴブリンの攻撃でやられると死ぬ

ダメそり...

腕と頭から血が

それにさつき棍棒を防いだら刀にヒビが

ヤバい！本能でわかつていて立とうとしても立てない

体もヤバい、武器の刀も折れ欠け詰んだか

刀を杖に立ち上がつるうとしたら俺の血が刀にべつとり

力タカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ

なんだこれ刀が動き出したぞ！――！――！

刀が淡くサクラ色に輝く。

なんと刀が治つてる！

しかも若干赤いぞいや紅いぞ！

しかしサクラ色に輝いて紅くなるなんぞこれ？

しかしゴブリンが空気を読んでくれたのはここまで2匹同時に雄叫びを上げて突っ込んできた。

刀は治つても体は治つてない…

避けれない……

刀を眼前に構え迎え撃とうとすると

目の前にまたサクラの花びらが…………一枚ヒラヒラと

あっ！ゴブリンに当たった。

ズシャツ！――！

なんとサクラの花びらが当たった所が斬れた！――1匹は倒れて、もう1匹は膝で倒れてる状態だ！

これなら……行ける！

痛む体を無理矢理動かし膝立ちのゴブリンに野球のフルスイングのごとく刀を横から振るつてやる。

グシャツと音を立て首と体が別れる。

もう一つのほうは片腕が無くまだ立っていない。

立とうとしている。ゴブリンに先ほど同じ様に刀をフルスイングで入れてやる。

「グギギギ……」

と声にならない声を上げて倒れるゴブリン。

「ふうへやったか……しかしゴブリン強すぎ……俺もチーム組むか……」

「……」

と愚痴を零してクエストを成功させる為耳のピアスを剥いで行く主人公であった。

刃の花びらは「コーカの血瓶の元解イメージ」で

うーん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0161z/>

紅き伝説

2011年12月1日18時52分発行